

福生の盆行事

都市化が急激にすすむなかで、町の景観の変化ばかりでなく、暮しのありようも大きく変化し、ここ福生でも伝統的なくらしぶりも今や昔のことになってきている。そうしたなかでも、くらしのリズムともいえるべき年中行事には伝統を受けついできているものがすこしみられ、ことに盆行事にはその面が色濃くのこっている。今回は、その盆行事を紹介してみたい。

盆棚づくり

盆行事のまず第一は、ボンダナづくりから始まる。七月一三日の午前中から始めるが、デイと呼ばれる部屋にボンダナを東向きに作る。養蚕に使用したクワクレダイにコノメ・ノシイタを載せ、ボンゴザを敷く。ニイコと呼ばれる

地域の生活文化を考える会

ゆずりは



新しい真竹を、クワクレダイの四隅にたて、三方を障子で囲む。そして、ボンダナの回りにチガヤをなつたものをはりめぐらし、これでボンダナは完成する。さて、ボンダナにはりめぐらすチガヤも、昭和四〇年頃までどこにでも生えていたが、今やなか／＼入手できなくなっている。

ボンダナの内側には、仏画をかけ、先祖の位牌を置くとともにナスの馬もかざる。ナスの馬の足は、豆ガラか竹でつくる。また、金・銀紙で作られたハスの花のボンバナも飾られる。

盆棚への供物

ボンダナには、次のようなものが供えられる。水とその年にとれた麦で調製されたマンジュウ、初どりの野菜、そ

れにミソハギの花である。ミソハギは、ドンブリに水を入れて、水にひたし供物にふりかけるために用いられる。このほか、ボンダナのチガヤの縄には畑でとれたミタビ（インゲンのこと）やホウズキ・ソウメンを掛け供える。

迎え火

一三日の夕方、家のカドグチで麦カラに火をつけて、「ボンサマ ボンサマ オムカエモウス」と唱えて先祖を迎える。墓が近くにあるとか、内墓のある家では、麦カラに火をつけて墓へ先祖を迎えにいたり、練香に火をつけて辻々に置きながら迎えに行く家もみられた。近年は、麦カラもなくなり、代ってオガラを使用する風が一般的になっている。

施餓鬼

一五日に寺で、施餓鬼がおこなわれる。施餓鬼にさいしては、寺へ一三日までに出席の申し込みをおこなう。一五日の午前中、寺へ参り、先祖供養のお経と法話とを聞くが、仏の拝礼にあたって、洗米や供物にミソハギの枝で水をふりかけるのが通例である。寺参りにあたっては、昔は大麥・小麦・粟などをツクリバチといって寺に届けるが、今では現金に変わっている。

帰りには、寺からオコモツ（菓子など）や色のついたボ

ンバタをもらう。このボンバタは、家のボンダナにたてかけ、送り火が終ってから、墓へもって行って立てる。

盆送り

一六日に、盆送りがおこなわれるが、このとき送り火をたく家もある。この日には、エンマのアカメシといってアズキゴハンをたき、このゴハンを仏につけて送る。また、盆送りには、ボンダナの供物を寺へもって行くことが多いが、以前は多摩川のニシノカワ（西の川）に流した家もある。

新盆

新盆の家では、新しい盆提灯を買い飾るが、盆の期間中に親戚がよりあう。また、新盆の家は、マイヅメブクロといって米をサラシの三角袋に一升いれて、寺に届ける。

盆の食事

盆にあたっては、人よせや仏への供物もあって、カワリモノがつくられる。一三日にはその年とった小麦で作ったソウメン、一五日にはマンジュウ、一六日はエンマノアカメシといって小豆飯を作る。なお、墓参りにあたっては、オサンゴ（米）をもって行く。

（担当 はしもと・ます 福生市史民俗協力員 加美在住）